

---

# オレの部屋

霧咲 ココロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレの部屋

### 【Nコード】

N7455E

### 【作者名】

霧咲 ココロ

### 【あらすじ】

ある安アパートの一室、通称『オレの部屋』は非日常で溢れかえっている…。生意気な悪霊の子供たち。ヒマな死神の少年。真っ白な人形の青年。大食いな妖狐の美女。そして、オレ。そんな非日常たちのユル〜い日常。現在作者が受験期間のため遅い更新がさらに遅くなっています。ご了承ください。

## 1・ぼやきから始まるハナシ（前書き）

作者初めての投稿小説です。

物書き初心者の作者ではありますが、

最後までお付き合い頂きますようガンバリます。  
ぶっちゃけ、めっちゃドキドキしてます。

それでは小説の方へどうぞ。

## 1・ぼやきから始まるハナシ

お前、知ってるか？

非日常ってのはな、  
意外と近くにあったりするもんなんだ。

そう、知らないだけで。

……ん？なんだ？

いや、

オレはンなもん知らんほうが良かったね。

ああ、欲しけりゃやるよ。

ちっこくて可愛らしい姿のまま、この世をさまよいつづけている悪  
霊の子どもたちが、

その子どもたちの保護者気取りで、全く仕事をしないヒマな死神が、  
カタコトをしゃべる主食が円滑油の、やたらと美青年な人形が、

オレが小さい頃から付きまってくる、食費がハンパない妖艶な美  
女姿の狐の妖怪が、

さあ、

どれがいい？

……っというか

もうホント誰でも良いから、  
コイツら誰か引き取ってくれよ

マジで。

## 2・非日常たちの日常。(前書き)

お待たせしました！

ご期待通り主要メンバー登場です！！

え、別に期待してない…？

期待して下さるとうれしいです！

## 2・非日常たちの日常。

突然だが、

オレの部屋には、悪霊と死神と人形と妖怪が住んでいる。

オレの部屋と言っても、家賃が安いから、と言う理由だけで選んだボロアパートのそれだ。

よって、それほど部屋が広いわけではない。

それなのにたつたふたつしかない部屋の一つのほとんどは、台所に占領されてるときた。

つまり、

この狭く苦しい座敷の中に合計6人が住んでいることになる。

異形のヤツらを人と数えるなら、だが。

なぜこんな状態になってしまったのか。

ああそうさ。

どうせオレは、小さい頃から変なもんが視えるし話せるし触れるし、挙げ句の果てには何故かそういうモンばっかに好かれるし……。

いやいや、今更嘆いても仕方ない。

そんなことよりも、今はアイツらをどうやって追い出すが先決だ。

あゝあ、ここはアイツらがいねー分部屋ン中よりよっぽど平和で快適だ。

狭いし暗いがオレの未来ほど真っ暗なワケでもないしな……。

「ハル！」

「ハル？」

「ドコにいるのさあ」

「ドコにいるのお？」

「レイが」

「ユウが」

「「捜してるよお？」」

うつさい、悪霊ども！

ちっさくて可愛い姿に騙される男じゃないぞ、オレは！

ついでに言うと、オレはハルじゃねーツつの！

オレはアキ！！

カミヤアキ  
上谷秋紀だ！

「あつくん出てきてよーふたりが呼んでるよー？ 困ってるよ

ゝ？？」

あア死神が呼んでる。なんてシユールな。

死ぬのかオレは！

死ぬのか！！

死なす予定もねえのに 呼ぶな、ひまじん暇神！

「えっト、おなかスイたよゝヒもジイよーでてきてよゝマスタあー」

テメー、人形だろ！

飯食わねーだろうが！！ 油差してやんねーぞ、コラ！



「そーよそーよ出てきてご飯作ってよアキちゃん。あたし飢え死にしちゃうわよ？ 家の中で餓死。ああんあたしってばなんて可哀想な美女なのかしら」

寝言は寝てから言え！

妖怪が死ぬのかこの程度で！ たった五時間飯食わねー程度で！

っ！か自分で美女ゆーな！

ちっとはガマンしろ、大食い女狐妖しょうわるぎつね怪！！

ッて突っ込みたい！ 非常に突っ込みたい！  
しかし、耐えろオレ！

でないと今までの苦勞が全部水の泡に…。

ガキンっ！！

・・・・・・・・ん？

ぎりぎり……………、ばきっ

「あ

「ハルっ！」

「みーッけた！！」

やられたっ！！

やっぱ押入れの奥の（大家のおばちゃんに黙って作った）隠し扉に隠れるだけじゃダメかッ！

くそっ、チビたちのかくれんぼ経験値を甘く見てた！

伊達に毎日遊んでねーってか、ガキども！！

「あっくん、ユウたちじゃないよ？ ボクの子カラ。」

スイッと横から顔を出したのは黒いローブを着た美しい少年。

「ちっ、テメーか死神 コノヤロー」

キツと睨み付けると死神はクスクスと笑って、オレの前に降り立った。

「いくらなんでもさあ」

面白がっているような美声が辺り一面に響く。

「そんなもん作らなくてもよかったんじゃない？ しかもこんなところに」

「うるへー」

オレだって一人になりたいときもあんだよ。

死神はまたクスリと笑い、少し後ろの方に突っ立っていた青年の背に隠れる。

青年は透けるように白い肌を持ち端正な顔立ちをしていた。

死神といい勝負だ。

青年は困ったように苦笑すると死神の頭をやさしく撫で、こっちに

向き直った。

「デモ、しょうガナいんじゃない？ 死神はユウとレイの願いを優先させるに決まってルんだカラさ、マスター」

青年は、どことなく発音のおかしい言葉で話した。

「そうは言うがな、人形。この家主はオレだぞ？ 何故そのオレが居候に虐げられなくちゃならない？ つうか何でお前は止めない！？」

人形はニコリと笑うと「命令がなかったかラネ」とかほざきやがった。

あ、なんか頭痛くなってきた……。

ふと上方に絡みつくような視線を感じ顔をもちげると、そこには重力をまるで無視したむちゃくちゃな場所に妙齡の妖艶な美女がたたずんでいた。

金の瞳を有する彼女の体には、異形の証 すなわち目と同じ色をした狐耳と狐尾が生えていた。

女は天井から音もなくするりと下りてくると何を血迷ったかオレの背中に躊躇無く抱き付き、何の前触れもなく耳を甘噛みした。

肩がゾクゾクする。

「何をするか妖狐<sup>ヨイコ</sup>！」

彼女は花びらのような唇に細い指をあて、コロコロと鈴のように笑

った

「あら、虐げてるなんて心外ね。こおんなに尽くしてるのに」

「どこがだ！」

いろんな意味で、面倒なヤツめ！

「ヨーコお前、家にいるときだけカラコン外すの止めろ！ 目え見るだけでチカチカする！ あと耳と尻尾も隠せ！ 誰か急に來たらどうすんだ！！ それと無駄に色気をまき散らすな！ いーかげんうっとおしい！！」

一呼吸で言い切って荒く息をするオレを見て、嬉しそうに微笑む美女。

あー！ この化け狐は、ホントにもう！！

「いいじゃない。家に居るときくらいのびのびさせてよう」

「アホか！」

むしろしすぎじゃボケ！

「アキちゃんのイケズう」

居るだけで人を不快にさせる牝狐がぶにと俺の頬をつついた。

それを機に居候共がいつせいに騒ぎ出して……

「そーだよ、ハル。夕飯作って！」 「そーだよ、ハル。夕飯作って？」

「ハルじゃねーツツーの！ いい加減覚える悪霊共！ つつかテメーら

関係なくね?!メシ、食べねーだろ!」

「「いいの!」」

「見てるだけで」「楽しいんだよ?」

「作ってあげてよ、あつくん」

「うるっさい死神!仕事しろ!」

「ひどっ!」

「マスター、そんな言い方なインじゃなイカナ」

「だったら止めろ、人形!」

「あら、夕飯まだなの。だったら代わりにあたしを食べる?」

ぴきっ

「……ああ、そうか。もともと家主に感謝なんて言葉テーマらの辞書にはねえよなあ……………」

うん、もついいよな…………?

……ぷっちん。

「ウガ——————!」

「「ハルがキレた~~~~ッ!」」

「ありやま。じゃ、あつくんのお言葉に従ってお仕事に行ってきた  
す」

「死神! まっテ、逃げるナ! アああマスター落着いて……。  
うわ目がマジでイッチャってルシ……………」

「うふふふ……、怒ったアキちゃんもかーわい」

そんなこんなで俺の一日は過ぎて行く。  
ああもうヤダこんな生活……。

## 2・非日常たちの日常。（後書き）

ご意見ご感想ございましたら、是非書き込んでやってください。

誤字脱字も見つけてしまいましたら、こそつと教えてくれたら嬉しいです。

未熟な作者ゆえ至らないところもありますでしょうが、  
これを読まれている読者様方には、これから先も長いお付き合いに  
なっていたきたいと思います。

という訳で、これから『オレの部屋』をよろしくお願いします！

2008/7/29/月

### 3・朝、けふこのころ。（前書き）

準レギュラー予定のお方、登場です！



### 3・朝、けふこのころ。

今日オレの部屋に神が降りてきた。

いや、もともとウチには神サマっぽい居たけど  
なんか本物らしき方が降りてらっしゃいました。

いや、たぶんウチのアイツもちゃんと本物なんだろうけどさ。

つか

オレ、キリスト教でも仏教でも神道でもねーのになんでこついつす  
つげえのが普通に降りてくるかな。

もつとなんかそれらしい奴ンとこ行けよ。

それこそなんだ、敬虔<sup>けいけん</sup>な子羊とやらのところへでもよ。

事の発端は今日の朝。

早朝

いつもどおり5時半前には目が覚めたオレは、

いつもどおり家事をこなし、

いつもどおり一通りそれが済んだところへ

丁度仕事から帰ってきた死神に茶を淹れてやって  
いつもどおり普通に一息ついていた。

ところが、

「神様？」

死神が突然変なことを言い出した。

「は？なに言ってんだ死神？

神サマはテメーだろ。

ボケたか？ついに神もボケたのか？」

「ちがうよあつくん、後ろ後ろ」

死神が指差す方へと顔を向けるといつのまにかそこには純白の少年が立っていた。

その背にはキラキラと後光が差している。

「あ？死神、コイツ誰？」

「やっぱ神様だ、お久々。っていつかどうしたの？　なんかあったの？」

無視か。

完全無視か。

いい度胸だ死神、今日のテメエの晩御飯に主食は無いものと思え。

「う、うん。久しぶり、死神」

純白の美少年は多少つつかえながら答えた。

「んで、神様何のよう？」

「いやまあなんというか、えーと……………」

美少年は戸惑いがちにオレを見た。

なんだ？

「あの、いいの？ さっきから君が無視しているこの方は……？」

お、カミサマいいやつじゃん。

「あ、あつくんね。まあ気にしないで、空気みたいなもんだから。話し続けて良いから」

……死神……。

「そうかそうか。よっぽどキサマ、家を追ン出されたいわけだな……？」

うんうん、何も言うな。わかってるわかってる。オレは空気だから何も聞こえないわけだしな。」

さすがの俺もキレるぞ？

「わ　　ゝゝ！ 違う！ 違うって！ あつくんやめて！ ごめん謝るから！ 悪かったって　　へぶっ……！」

よし、いいだろう。ただしお前の夕飯主食無しは決定事項だからな。心やさしいオレは夕飯主食抜きとビンタ一発で許してやることにした。

「まったく……。ンで、こいつは何なんだ？」

オレは言いながら美少年を指さした。

「あ、はじめまして。お邪魔してます。」

「ああはいはいごゆつくり…じゃなくて！ 何なんだよ！」

頬のはれた顔をさすりながら死神は呆れたような顔をした。

「だからさつき言っただでしょ？ 神様だよ」

ンなもん聞いとったわ！

そうじゃなくて、なんでそんなもんがここに居んだっつーの！  
ある意味大問題じゃねーか！

つーかその前に信じられるわけねーだろ！

「えつと神です。どうぞよろしく」

「ああ、オレはコイツの家主の上谷秋紀…」

「通称『あつくん』だよ！」

死神、今日のお前の夕飯はたくあんのみな。決まり。

……その恥ずい名前をさらっと出すなや。

いや、というかその前に神様ってこんなに簡単に降りてきていいものなのか？

「別にいいんじゃない？ 問題ないさ、ボクだっているしね。  
あと夕飯たくあんオンリーって。」

心ン中、読むんじゃない！ マジで追い出すぞ！

「わわわっ、ゴメンって！」

「ったく……。ンで？ その神様ってのは何しにきたんだよ？」

「あつ、そうでしたそうでした。えつと死神。」

神様は死神のほうを向くと表情を引き締めて言った。

「業務連絡です。キミのさっきのお仕事で魂の獲り忘れが確認されました。」

今回はひとつだけだったので僕が回収しておきましたが、次からは気をつけて下さい。  
「以上です。」

死神……

「テメー仕事サボったんかい……」

「ち、違つて！手違い！手違いだよ！」

死神必死。

俺は一度ため息をつくつぶーたれた死神の頭を撫でながら  
神様とやらに言った。

「わかったわかった、もう忘れんじゃねーぞ。人の生死に関わる仕事なんだし。」

神様だっけ、お前もこんな朝早くに御苦労さんだな。なんなら一杯茶でも飲んでいくか？」

さすがに部外者には優しくする。

「あ、まだちょっと忙しいので今日はここで失礼させていただきます  
す」

「そうか、じゃあ仕事とやら頑張れよ。あ、そうだ死神、神様送っ

てってやれよ」

「え？ 僕が？」

微妙な顔をする死神と

不快感をあらわにしたオレ。

「行けよ………？」

「はいいいいいいいい！！」

死神は泣きました。

“ In 白い光 ”

「君もいろいろ大変なんだね」

「まね。でも楽しいよ、あの家は」

「君を見ると分かるよ。でもどうして彼は自分の名前が嫌いなのかな」

「ああ、それはたぶん僕らが好き勝手に呼んでるからだと思うけど……。」

でもまあ上谷…もとはきつと神家カミヤかな、

ボクはすつごくいい名だと思っただけだなア」

「うん、僕もそう思うよ。……あ、もうこのへんでいいよ」

「もうちょつといっしょに行くよ。また何時でも来てね？神さま」

「でも、あそこは君の家じゃないだろう？いいのかい？また行つても」

「あつくんも口ではああいつてたけど、神様がまた来るの楽しみにしてるって。」

きつと来てくれたら喜んでくれるよ、心の中ではね。だから遠慮しないでまた来て。」

「本当かい？それは嬉しいね」

「うん！ あつくんはああいう人間なんだよ、裏表ありすぎ」

「ふふっ、そうみたいだね。素直じゃないけど真っ直ぐな人だ」

「ま、そーいうところが可愛くもあるんだけどー」

「そうだろうね。」

じゃあホントにもうこのあたりでいいよ、ありがとう。  
死神、仕事はきっちりやってね。」

「ううゝ、わかってるよう、それくらいゝ。神様だつてサボっちゃダメだよ？」

「もちろんさ。じゃあまたね、死神。」

「うん。じゃあね、神様。」

こうしてオレの部屋の朝は過ぎてゆく。

非日常たちとの日常は朝も昼も夜も退屈しなくていい。  
だが逆を言つと朝も昼も夜も面倒なことが起こりっぱなしだ。

ああ、疲れる……………。



#### 4・飯、明け暮れ。

今オレの目の前には絶世の美女がいる。

「ヨーコ」

「なーに？アキちゃん。」

目の前でプカプカ浮いていた美女は  
オレの呼びかけに嬉しそうに振り向いた。

「ついにあたしの魅力に気付いたの？ 食べちゃう？あたし食べられちゃう？」

「違いよバカ。」

呼びかけるたびにコレだ。

毎回のことだが、まったくもって疲れる。

「そこジャマ、テレビが全然見えねえ。」

キゲンよさそうにふわふわと浮いていたヨーコの表情は  
そのひとことで一変、ぶうたれた顔に変わった。

「ちょっと見えなくらい、別にいいじゃない」

「画面の5分の4は見えねーんだが、それがちよつとか？」

ヨーコは諦めたように溜息をつく  
ずとんと床に降り立ちオレの横に座った。

すると、途端に涼しいエアコンの風が。  
チクショーム。涼しい所、独り占めしてやがったな。

「それと、お前食うくらいなら台所にあった テコ指にはめて食う  
わ。

立ったついでだ、 テコ取ってこい。」

するとヨーコは呆れたようにオレを見た。

「アキちゃんさすがにそれはデリカシーなさすぎよ、女の子は傷つくわ」

おい、どこの世界に500年くらい生きてる化け狐を『女の子』と呼ぶやつがいる？

「いいから取って来い。少しくらいならお前にも分けてやらんでもないから」

「まったく、アキちゃんはしょうがないわねえ。待ってて」

サクツと物につられるヨーコ。

ハートがふたつくらいくつついた言葉とウインクを一つ残して台所へ向かう。

お前、語尾のハートマークはオレに対してじゃねーだろ。

食か？ 食に対しての愛<sup>ハート</sup>なのか？

突っ込みながら、その後姿を見てオレは思う。

黙ってりゃ、美人なにな。

やや釣り上った金色の瞳。通った鼻筋に透明な肌。  
見慣れた俺でさえ、ため息が出るほど美しく整った顔立ちは、  
この世のものとは思えないほどであった。

まあそれもそのはず。

アイツは人じゃない。

彼女は妖狐。<sup>ヨウコ</sup>

永い時を生きる化け狐なのだ。

人間<sup>ヒト</sup>とは決して相容れられず500年間ずっと一人だったと、  
あいつは前に話してくれたことがある。

楽だったんだろうな、と思う。  
だけど寂しかったろうな、とも思う。

そう、オレがアイツを受け入れるまでは……。

「はいアキちゃん！お待ちかねのポテ　よ」

不覚にもオレが感傷に浸っているとその空気をぶち破る声が聞こえた。

ヨーコ、少しは空気読め。

「気にしないの。度量の狭い男は嫌われるわよ?」

お前らという非常識で厄介なものを自分の家に住まわせてやっている時点で

自分ほど度量のでかいヤツはいないんじゃないかと思っただがな、オレは。

「あら、でも最初に言ったのはアキちゃんのほうよ?」

「何をだ?」

オレは首をかしげる。

この妖怪に何を言ったか、頭の中の引き出しを一つずつ開けてみるがさっぱり引つかかるものはない。

それを見て、ぷつくりと頬を膨らませながらも、どこか楽しそうにヨーコは悪い狐特有の笑いを浮かべた。

「覚えてないの? アキちゃん言ったじゃない、

『寂しいならボクのお家おいで。もし気に入ったのならずっといっしょにいよう』

って」

「何年前の話だ!」

オレがまだ『ボク』だった時代ときの話をいつまで引きずってんだよお前!

ありえねえ!

今度は永い永い時を生きてきた妖怪特有の時間感覚を発揮しやがった。

くすくすと笑う妖狐を見るとどうしても本心が駄々漏れになってし

まう。

くそ、これではいつまでたってもコイツには勝てない。

「それであたしはアキちゃんの家に来ることになったんじゃない。

もっ、あんな衝撃的なプロポーズ忘れないでよ、アキちゃんたら」

いや、まずしてねーからプロポーズ！

「つつか、タダでは言ってねーよな！？ 思い出したぞ！

幼いながらもオレはちゃんと『家賃払ってくれるならね』って言ったハズだ！

いや、言っただけ！」

断言するしできる！

するとヨーコは急にくすくす笑いを消し唇に指を当ててウィンクしてきた。

「いやん、そこは記憶から抹消しといてよ」

「するか！

てか、今月の家賃まだ貰ってねーぞ！ 出せ！..」

「とりあえず、今はこの テコで許して？ ね？」

手に持ってた袋を差し出すヨーコ。

<sup>それ</sup>  
テコはオレのだったの！

「もうちょっと待って、もーすぐ給料日だから。 .....それとも今体で払う？」

心から遠慮しとく。

ヨーコはその美貌を使ってキャバクラで働いてるのだが、  
どうもコイツが、というよりか店自体が売れていないようで給料も  
ギリギリらしい。

もうそうなると、その余裕というかお気楽かげんに呆れというかも  
はや感心さえするヨーコの言動。

その時

「……ただいまー!」

「ただイマ、マスター。」

お使いに行っていた4人が帰ってきた。

まあ実際買ってきたのは人形ひとりだろうけど（死神や悪霊たちは  
姿が見えないから）。

さて、じゃあ全員そろったことだしこの人外どもに飯でも作ってや  
るか。

結局開けられることのなかったスナック菓子の袋、

ヨーコから奪い取ってオレは台所に歩を進めた。

5・晴れろ、雨の日の語りへ。(前書き)

長らくお待たせして誠にサ―センしたっ!!  
やっと一段落したので再開ですっ。

うれっ〇(^ ^)〇

## 5・晴れろ、雨の日の語りへ。

「ヒ〜〜マ〜〜だー〜〜」

うっさい、ひまじん暇神。

「だってあつくん、休みだよ？800年くらいぶりの休みだよ？」

気持ち分かるが黙れ  
ハッキリ言ってうぜー。

「だって暇なんだもん、ねー人形」。突然お休みもらったら誰だっ  
てこうなるってあつくーーーーーーーーーーーんやめてや  
めて投げないでいくら死神ったって畳で投げっぱなしジャーマンは  
ヤバいっていやマジでマジで助けて人形うわあああああああー  
ーーー」

うっせーっつってんだろ、学習しろバカ神。  
ま、スッキリはしたがなオレが。

この死神（と書いてバカと読む）は久しぶりの休みに混乱してるみ  
たいでだいぶウゼーです。  
ぶっちやけ死んでほしいです。

つか死ね。

「それはないでしょあつくん。」



あ、バカが復活した。  
チッ、もう少し強めに殺るべきだったか。

「いや、あれだけでもたぶん常人は死ぬくらいの威力……って何ユウリと立ち上がったんの！？　ちょ何してんの？　お願いだから気配消して何気にボクの後ろに回り込もうとしないで！」

さあ、何いつてんのかなあ？ 勝手に人の思考読むような奴に手加減なんて言葉必要なかったよねえ？

「ごつ、ごめんなさいマジスママセン！ ホントに謝るから！ お願ひ！」

つてゆうか人形何笑ってんの？ ボク軽く殺されかけてんだよ？  
ねえっ てば人形！ ああああつくん！ 後生だからホント許して  
ええええええええ！！！」

ハイ、軽く無視つと

二分後

「そウイエばさア」

死神が畳に沈むのをいつものように微笑ましそうに見守っていた人形は俺にほうじ茶を淹れてくれながら言った。

え？ほうじ茶とか爺くさいって？

ほっとけ、オレの趣味だ。

「死神ってドーイウ経緯でこの家に来タノ？」

「あれ？言ってなかったっけ？」

オレは軽く首をかしげた。

「んー、なンカ最初死神が来タトキ……、

『ユウたちの連れ。で、新たな居候』

てマスター言っテタケど、詳しイ話は聞いてないナア」

そついや、話してなかったかもな。

「ンじゃ死神が沈んでる間にめんどっちーが思い出話でも……」

「うん！ マスターの昔ノ話、聞キタイ！！ 色々ぜんブ！！」

全部……ね。

「ま、そのうち話してやるよ」

まず死神のことを話すなら、そうだな

とりあえずあの厄介な悪霊どもの話からすっかな。

オレはイライラしていた。

やっと親の手を離れ、貧乏だがアパートの一室を借り、一人暮らし

という生活を手に入れたというのに。

そりゃ一人暮らしといってもすであの人外ダメギツネの居候はい  
たが。

それをナシとしても毎晩毎晩しくしくすすり泣きが聞こえてちゃ眠  
れやしねーってーの。

いや、まだ一人なら許容範囲なんだけどな。

実家に居たころからそんなもんゴマンと聞いてるし。

だが

だがな。

それが二人になって、

しかも一人は女の声つつたらもうどうしようもねーだろ。

しゃーねーからオレはヨーコを連れて声のする方を見に行った。  
もちろん、オレの睡眠不足を解消するために。

そしたらよー、案の定でかいビルの横で  
二人うずくまって寄り添いながらめそめそ泣いてたんだ。

ちっけー子供たちが。

で、オレは言ってやった

「睡眠妨害だ、どっか消えろ」って。

『酷くなイッスかそれ』

うつさい人形、黙って聞け。

つか、アイツらのウザさは今以上でない  
いきなりオレを殺しにかかってきやがったんだ。  
まあヨーコがキレて返り討ちにしたらけど。

『ヨーコならやりそう……。ていうか殺シに?!』

うん。悪霊なら割と当たり前のこと、  
つかやらんと悪霊とは呼ばんな。

そういうわけでフルボッコにしたのち泣いてたワケを聞いたんだ。

『先に聞いてあげようよ!?!』

なんか取り憑いてた家がビル建てるために壊されて家がなくなった  
からつつつてた。

『スルー!?!』

頑張ったんだけど、壊されちゃったから、悲しくて悲しくて  
思い出の場所だったから、ふたりの記憶が残つてるところだったか  
らつて。

思いだせないのが悲しくて  
その記憶が亡くなったのが、哀しかったらしい。

『……………』

ちなみに壊した連中およびその上司は呪殺済みだつて。

『……………。そう』

「ンで、なんか知らんがアイツらはヨーコの独断で家に遊びに来て以来、いつのまにか素知らぬ顔で住みついてたんだよ。」

「それで？それデ？」

「それを知った死神がオレン家来て、いろいろあつて監視兼保護者として居候することになった。」

それだけ。」

そう言つたら、人形は続きを期待するようにオレを見たが、特に続かないのでなんとも言えない沈黙が訪れる。

.....。

いつまで待つても言葉を継がないオレとこの空気にしびれを切らした人形が口を開く。

「...それだケ？」

「うん、それだけ。」

それ以外に何を話せと？

「ちヨツ、ちよつと待つテ！僕が聞いたカッタのはソノ『イロいろあつテ』の部分なンダケど？」

ああそつか。

「じゃあ、明日な明日。」

オレは欠伸を一つして言った。

「今日はもう夜も遅いし明日は祝日だから、そんとき話してやる。  
だから今日はもう寝る。」

「むー。」

「物分かりの悪い子は嫌いだぞ?」

オレは軽く人形を睨んだ。

「い、イエッサー!」

「よし良い子だ。」

「つーわけでおやすみ。」

オレは掛け布団にくるまって瞬時に意識を落した。

「おやすみなさい、マスター」

その夜の最後に聞いた人形の言葉は、

珍しく綺麗な発音だった。

ちなみに死神はそのまんま放置した（一応あとで人形が毛布をかけてやったそうだが）

## 5・晴れろ、雨の日の語りべ。（後書き）

えーこのたびは『オレの部屋』を読んでくださってありがとうございます。

それと

かなり図々しいとは承知の上なのですが読者の皆様にお願いがござ  
います。

どんなものでも結構です。

『つまんねー』でも『楽しかった』でも、一言でもいいです。

ご意見ご感想、どんどんくれてやってください。

よろしく願います。

最後に。

こんな拙い文章でちゃんと皆様に楽しんでいただけているか作者は  
ほんとと不安なのですが、

これからも『オレの部屋』をよろしく願います。

秋紀『ホント頼りねえ上にヘタレだが、よろしくな。』

……アキ、なんでここにいろの？

ここ私のページだよ？

っていうかヘタレって……。

……がんばります。

## 6・軽い昼下がり。（前書き）

更新遅くて本当にすみません！

期末テストも終わりました。冬休み中にはもうちょっと早く更新します！

してみせます！！

……たぶん。



## 6・軽い昼下がり。

今日は日曜日。

「なあ人形。」

「なニ？マスター。」

一部のクソ忙しいビジネスマンや学生その他諸々を除く、みんなのおやすみの日。

誰がなんと言おうと今日だけは世間の休息日なのだ。

もちろんオレも例に漏れず家でゴロゴロしていた。  
つまりやることなくヒマだった。

そんな中、チャキチャキと家事をこなしている人形になんとな  
く100%気分で話しかけた。

「ナアにマスター」

「いいから」

近づいてきた人形のほつぺたをふにふにとつつく、つねる、ひっぱ  
る、最終的にはぎゅうとつまんだ上でひねってねじった。

「はーヒ？はふはー？（訳：なニ？マスター？）」

「おめー痛くねーの？」

「ほへハひひ（訳：そレナリに）」

オレはつねる（つーかもうよじるの次元）のをやめ、じっと人形を  
見た。

見た目も感触も完全に人間のそれ。  
ただ普通の人間よりキメのこまかくて白い（つか血の気がない？）  
肌で、世の女性が見たら8割がたが憧れと嫉妬の目で見えるだろうこ  
とが分かるくらい整った顔なだけ。

じつとしている姿はまるで蠟人形のように。

人形はあれだけやったのに少しも赤くなっていない頬を軽くさすり  
ながら

「いてテ……。なにか恨みでモテキたの？マスター。そうダトシて  
も僕をストレス発散に使ワナイでほシイナあ……」

ブツブツ言いながら、流し台の方へ戻る人形。  
最初は単なる好奇心。

「お前つて結局なんなの？」

人形は皿を洗いながら器用にこちらを向いた。  
首が180°回っているのはご愛嬌

「いや、何と言ワレましテも…。  
昔ノ人間に神を模シテ作ラレた人形ダツて、まエ言わナカッたっ  
け？」

そう言いながら人形はやっていた仕事を終わらせてこっちの部屋  
に来た。

その時、オレの前にきちんと正座するのはクセだそうだ。

まあ馴れたけど。

「ん、聞いてるけどさ」

そんなんでも納得できるかつーの。

「具体的に言えよ。

なんちゅうかほれ、よくあんじゃん。なんだっけ、呪いの人形とか？」

ああ、なんでオレのボキャブラリーはこんなしかないんだろう……。

「あ、人形とシテの種類ネ」

そ。まあ別に答えなくてもいいんだけどさ。

…なんか真面目に答えてくれそうなお雰囲気だけど、正直暇つぶしに聞いたただけなのだが。

ちよ、罪悪感が湧いてくるからその真剣な表情やめてくれない。

「そうだネ。形状トシてハ、人間もどきが一番近いのカモシレないね。でも中身としテハ自動人形とか、人造人間になルノカな。」  
ヒューマノイド  
オートマタ  
アンドロイド

……なあ人形、できれば日本語で話してくれないか？  
まったく理解できんのだが。

「まあ簡単に言ウト怨念のナい呪イの人形つて所かナ？」

「へえ。お前機械だから油飲んだりすんのかと思ってた。飲み過ぎ

て吐いたり、ときたまその吐いた油に混じって齒車とか出てきたりするし。」

「うん、ちヨツと焦るヨねアアいう時ッテ。」

くすくすと笑って人形がいう。

自分のことだろーが。

そのときピーッと台所からやかんが音を上げた。  
人形がとたと台所へかけていく。

どこの主婦だお前は。

俺の前の卓袱台にコトリと湯呑み茶碗を置くと  
人形はさっきと同じところにさっきと同じ姿勢で正座する。

ただし、手にはアツアツに温められた潤滑油。  
なんか微かに香りがするから、今日は香油でもブレンドしてあんの  
かもしれない。

そんなデキた不思議な人形にオレは気軽に話しかける。

そして人形も律儀に答える。

嬉しそうに。

「お前がここに来てどれくらい経っけ？」

ぽつりとつぶやいた言葉に一瞬キョトンとした顔をされたが、次の瞬間にはにっこりとお得意の笑顔で答える

「そおダネ。家に来たッテイう定義で言うなら、たぶん8ヶ月と12日と26分と57秒かな。日にチニスると256日ちょっとだよマスター？」

「もうそんなか」

なーんか感慨深くもなるわな。

口元に手をやって、お得意のくすくす笑いをする人形。

「もおそんだだよマスター」

「お、いま上手くしゃべれたじゃねーか人形。」

「本当？やッター！」

「あ、戻った。」

「えエ？」

「日々精進せい」

「うん、マスター！」

こうして微妙ながらも人形との会話は続く。

こんな会話、最初はなかったんだ。  
狂った機械がただ其処にあるだけ。

人形がまだ今の人形じゃないとき。

さいしよに、のちに人形になるモノと出逢ったのはある路地裏のことだった。

学校から帰る近道。

突然そこに人形が降ってきた。

空から降ってきた人形は齒車やらバネやらを飛び散らせながら地面に叩きつけられた。

ちょうど其処には大量のゴミ袋があつたので木っ端微塵になることは避けられたが。

何を血迷ったかオレはその飛び散った破片や部品をかき集め人形を持ち帰った。

それ のちに人形になるモノ があまりにも人間に酷似していて、焦っていたこともある。

しかし大部分の理由としては、  
小さい頃から悪霊や幽霊が見えたり、  
その頃すでに妖怪のヨーコが俺ン家に住み着いていたことから、  
割とそういうことに寛容だったからなのかもしれない。

壊れた人形を家に連れ（持って？）帰ったオレはヨーコに無理を言つて、怪しい妖術で直してもらった。

その際、直す代償だとかなんとかでヨーコはいろいろなことをねだってきたが、粘りに粘った交渉でおでことほっぺと首筋にちゅーで許してもらった。

ちなみにチューされたのは俺なのだが。

その後、目が覚めた人形は自分が誰だか分からない上に言葉に障害が起きていた。

まあなんとか日本語はしゃべれるようだったので問題はなかったが。

そのときの記憶は曖昧で神様に会いに行ったとかなんとか言っていたが、自分に関する記憶はすっぽりと抜け落ち、その記憶が戻るのには数日を有した。

そうこうしているうちに、ちびつとずつ自分が何かを思い出してきた人形は（直接ではないが）自分を治してくれた人間、つまりオレを『マスター』と呼び、付き従うことにしたらしい。

ついでに、それをオレが渋々ながらも了承したときここに居座ることが決定したっぽい。

あゝそのつまりあれだ、  
いろいろ迷惑なんだが。

小さな親切、大きなお世話つつつヤツか？

違う？

知るかよ。

それ以来この調子だ。

ちなみに名前はヨーコの

「まんまアタシみたいな感じでいいんじゃない？」  
の一言で決まった。

喜んでたみたいだから良いと思うんだけど。

食費（＝オイル代）は酷いことになってるが…、  
まあ便利なお手伝いさんがいると思えばいいもん、なのかもしれな  
い。

たとえそれが  
しよっちゅう主人<sup>マスター</sup>に逆らう  
不良人形だとしてもだ。

ま、別に良いけど、  
どうでも。

何回か売っぱらったろかと思ったことはあったけど直しちゃった  
責任もあるし。

人形は一応家族だし。

「あ。」

「どうした人形」

「ゴめんマスター。マスターの分だけ布団干すノ忘れた」



……いや、やっぱりいつか叩き売ったろ。

ムカつくもん、コイツ。

## 7・ 赤い花の朝。(前書き)

命様に書いて頂いたイラストをイメージに書かせてもらいました。

http://hp23.0zero.jp/bbs/view.  
php?uid=himitukiti&dir=382  
&amp;num=13&amp;th=&amp;unum=1  
22243907057&amp;th=1

ここですよー。

ぜひ命様の神絵をご覧になってくださいね。

今回も死神視点ですよー。

では、本編へどうぞ。

## 7・ 赤い花の朝。

あーやっぱりサボればよかったな。

サボりかけたからあつくんに追い出されたんだけど。

どーも、死神です。

今日もボクは人殺しにいそしんでいる真っ最中です。

ちなみに今回の標的はちよつと遠い場所にいてやっぱサボればよかったと少し後悔している今日この頃だったりします。

「ううさつぷ！」

神だからと言って寒さを感じないわけじゃない。

凍えるように冷えた風はボクや神様だって寒いのです。

てなわけでボクはローブをかき集めて暖を取る。

ま、寒くたって死にやしないんだけど。

そんなこと考えてるうちに今回のターゲットが住む場所にたどり着いた。

「病院、ね。」

ボクには馴染みの深い場所。

ある意味では仕事場みたいなもんかな。

まあここは来るの初めてだけど。

「さてさて、いったいどのお部屋なのかな？」

壁をすり抜けて標的<sup>ターゲット</sup>を探す。

きよろきよろとあたりを見回しながらちよつとだけ気配にも気を配る。

あつくんの時の二の舞になりたくないもん。

そろそろと廊下を歩いて行くとひとつの部屋の前にたどり着いた。

「ここかな？」

087号室 秋葉 音里子

「……あきば、ねりこ？つて読むのかなあ？ 変わった名前。」

最近の親ってよくこーゆー訳のわかんない名前の付け方するよねー。  
読みにくいっいたらもう。

昔は良子とか優子とかが多くて楽だったのにな。

「まあどーでもいっか。」

普通に鍵が閉まっているドアを軽く無視して通り抜けると、そこには一人の女の子がベッドから起き上がって外をを眺めていた。

あれ？こんな時間に起きてるなんて、眠くないのかな。

正直ボクは眠い。

「こんばんわ？」

一応、聞こえてないかもしれないけど、アイサツ。  
ついでに言つとくとコレもあつくんの時からやってること。  
だって怖いんだもん。

女の子は余程びっくりしたのか、飛び上がってきよろきよろと周り  
を見回した。

んー？……見えては、いないのかな？

「だあれ？」

不安におびえた声。

そんなに怖がらなくなつていいのに。  
別にすぐ殺すつてわけじゃないんだから。

彼女の動揺を抑えようとボクは彼女の前に移動した。  
ちなみに浮遊で。ちよつとくらい死神っぽく見せとかないとね。  
あ、見えないんだっけ？

「ボクは死神。」

「シニガミさん？」

「うん、そうだよ。キミは、アキバ ネリコ？」  
「んーん、ちがうよ」

ありや？間違えたかな？

「あたしねりこじゃないよ。あたしネリネ。秋葉 あきは 音里子。」

あ、ネリネって読むのか。

「じゃあボク、音里子のことネリネって呼ぶね。」

「いーよ、ネリで」

「うん、じゃネリね」

「ネリネじゃなくて、ネリだってば」

「あうわかってるよ、ネリ」

月明かりに照らされたネリはネコのパジャマを着た小さな女の子だった。

見た目的にはだいたいユウとレイと同じ年くらいかな

「それでシニガミさんはなにしにきたの？」

「あ、そうだった」

忘れるとこだった。

「えつとお、ボクはキミを殺しに来ました。キミはもうすぐ死ぬから、お迎えって言ったほうがいいのかな？」

ネリは一瞬ポカンとして、それから急に悲しそうに顔を伏せた。  
ボクの言葉に対してのいつもどおりの反応。  
ある意味それがないと安心できないよボクは。

「あたし、しぬの？」

「うん。」

「そっか」

「いつ？」

「今晚中。ボクとしては月が綺麗な間の方がいいと思うんだけどね」

「そかな」

「ボク的にはそれがおススメ」

「ふーん？」

ネリはちよつとだけ首をかしげて頷いた。

「でもころしにきたってことは殺人狂かなにか？」

「殺人狂の部分だけ漢字にできる最近の小学生に疑問を抱いた今。つて違つよ！魂を取りに来たの！」

「タマシイ？てことはアクマ？」

「天使と言つてよ。まあ実際問題神様のパシリみたいなもんだけど」「パシリ？ださ」

なんか泣きたくなつてきた

「で？どうするの？パシリさん。いつタマシイとるの？」

「んー君が望んだ時かな。」

てゆーかパシリさんはやめて

「のぞんだ？」

「うん、今夜中ならいいよ。いつでも言つてね」

「じゃいま」

「え？」

「いま殺<sup>や</sup>つて」

「殺つてって…どこで覚えてくんのさそついう言い方。」

「どうせしぬならはやいほうがいいでしょ」

「…まあいいけどね。親御さん呼ぶ？」

「んーいいや、どうせしぬならよんでもムダだし。しんだらくるだろつし」

「そつか。この世に未練は？」

「ないとはいきれないけど、このとしにはいいけいけんつんだとおもつよ」

「……ませてるね」

「おとなびてるといつてちよーだい」

「背伸びしてるねー」

「さきにしぬ？」

「わかったよ。それじゃ良い眠りを。」

そういつてボクはその小さな胸に鋭い鎌を突き立てた。

「Good Night、ネリ。良い来世を」

\* \* \*

「あーねむー」

結局、ボクは徹夜したっばい。

最初<sup>ネリ</sup>の犠牲者が早く終わってホッとしてたけど、  
やっぱりあのあと仕事しまくって、帰ってきたときにはもう5時  
すぎだった

寝るのも面倒になって窓についている手すりに腰かける。

手すりはきいと小さく軋んだ。

「ただいま」

ほとんど習慣になったあいさつ

もちろんこんな時間に返してくれる人なんていない。

寝静まった町。



人形でさえ眠っているこの時間にボクは誰にも返されない挨拶をする。

凪いだ風をこの身に受け、ゆっくりと空気を吸った。

この時期特有の冷たい澄んだ空気。

カラダの中が透き通っていくような気分になる。

「死神か…？」

思いがけず後ろから声が聞こえて、内心ちよつとびっくりした。空気を震わす少し低い声。

「おかえり」

そのひとは静かに優しく響いた。

振り返るとまだ眠そうな目をダルそうに持ち上げ彼はゆっくりと手すりにもたれかかった。

「ただいまあつくん。ごめん、起しちゃった？」

「ああ。もつと謝れコノヤロー」

「冷たっ！ボク徹夜で仕事してきたのにつ」

「知るか」

彼のいつもの口癖にボクはけたけたと笑った。

「っーかおい、なんだこの花は。お前の仕業か？」

「んー？」

ボクも気づいてなかったが手すりには何か絡みついている。

ああ、これって……

「あれだよ、あさがんばな」  
「はあ？」

あ、面白い顔してる。

今度はボクは意地悪そうに笑って言ってやった。

「神様に創ってもらったの。朝顔と彼岸花のミックス」  
「……。たしか神様忙しいつつたよなー。そんな真面目で大変そうな神様にまだ仕事を増やさせる馬鹿者はドコノドイツかなー？あつはつはー神に代わってぶちのめしてやろうかなー。」  
「じょつ冗談だよ！そんな怖い顔しないでよ。」

あつくんてば冗談が通じない。

「彼岸花の亜種だと思うよ。奇形かな、珍しいね。」  
「今度はホントーだろーな」  
「もっちろん」

そのときちょうど朝日が出てきた。

日光も月光も何千年何万年と見てきたのに今でもまだ綺麗だと思う。

「綺麗だな……」

あつくんが小さくつぶやく。  
ボクもコクリとうなずいた。

でもね、あつくん。

ボクはもつともつときれいで美しいものを知ってるよ。

「キレイだね、あつくん」

ボクはほとんど寝かけているあつくんを見ながら言った。

よくみるとあつくんの目の下にはうつすらとクマ。  
きつと宿題が終わらなかったんだろーな。

「あつくんですら神々しく見えるよ、死神だけに」  
「面白くねーんだよバカ」

一蹴されちゃったけど、本当にそう思ってるよ。  
絶対本人には言ってるやんないけど。ムカつくし。

「そうゆーときは花とかをたとえに使うもんだっつーの」  
「花、ねえ」

そついつてすぐそばの紅い花を見るとあつくんが何かを思いついた  
ように顔を上げた。

「そついや彼岸花か。お前にやなじみの深い花じゃねえのか、死神」  
「あー、もうすぐお彼岸かー。じゃあネリネもすぐ帰ってくるなー」  
「ネリネ？今日のターゲットか？」  
「うん。ボク読めなかったよー漢字」

あつくんは少し考えるようにこめかみを二回たたいて言った。

「ネリネ……ああ当て字だろうな。ネリネっつーのは花の名前だ」  
「へ？そーなんだ」  
「知らなかったのか？」  
「だってボクらが創ったのは人間だけだもん」

「そーか。女の子か？」

「うん。」

「しあわせだったか？」

「たぶんね」

「そうか、ならいい。これからは仕事はきっちりやれよ。でねーと即刻追い出すからな」

「りょーかい」

そういつてあつくくんは色褪せたのれんをくぐって台所に行ってしまった。

ボクは好奇心でその背中越しにあつくくんには内緒でちょっとだけ頭をのぞいてみた。

とたんに心配と疲労の嵐が流れ込んできた。

いつまでたっても帰ってこないボク。

死なないとわかっていても  
見えないとわかっていても  
心配でたまらない。

でも自分にはどうすることもできない。

仕事なのだから。

行かせたのは自分なのだから。

だからせめて

帰ってきたら真っ先に言ってやろう。

おかえりって

こんな時間までよく頑張ったなって。

ボクはこれを感じてジーンとなってしまうた。  
あつくんのひねくれ者め。

えへへ。

これだからあつくんの近くは離れられない。

ついでにネリネについての知識も流れ込んできた。

なるほど、ネリにはぴったりの花だとボクは思った。

【10月13日の誕生花 ネリネ。花言葉：輝き、また会う日を楽しみに、華やか、箱入り娘、幸せな思い出】

ボクはあの箱入り娘に最後の幸せな思い出を残してあげることができただろうか。

## 8・あくまで普通。(前書き)

新キャラ登場です。

うわ、二ヶ月ぶりの更新って。

すみません！

## 8・あくまで普通。

ある日の朝、

「ハレルヤ  
hallelujah!!」

オレの部屋に神を讃える声が高らかに響いた。

それはテスト明け休みで死神や悪霊たちとだらだらしていた時のこと。

何もない空中に突然剣がはえてきた。

死神の頬をかすりかけたが、死神は寝ころんだまま微動だにせずにつこりと黒く笑っただけ。

こつちを向いてきたからオレも微笑み返してやる、よりドス黒く。

宙に浮く剣に対して誰も驚くワケでもなく怖がるワケでもなく、オレは部屋の端に置いてあったものをただ淡々と手にした。

生えてきた剣先は不器用に空を切り裂く。

やがて人が一人通れるくらいまで斬ったところで剣が引っ込み、ガツタガタの裂け目から今度は何やらズルリと黒いものが出てきて…、

オレはそれを問答無用にたたき落した、ハエ叩きで。

「ぶッ!？」

べしゃつと音がして出てきたものが落っこちる。  
続いてその頭を思いっきり踏みつけた。

これで侵入者は動けません。

という訳で、《不法侵入者の捕まえ方（上谷家風）》をお送りしました。また次話でお会いしましょ「待て待て待て待て！終わるな！俺来たばっかだし！」下のハエがうるさいですね。

「うつせーなこの不法侵入者が」

「あつアンタなあ……！」

「黙れ潰すぞ」

軽ーく殺気をこめて言うのと、とりあえず大人しくなったようだ。

「で、お前はなんだ？」

いつもの通り聞く。

これがいつも通りというのが果てしなく哀しい。

黙り込む闖入者に、死神はかつたるそうに立ち上がって憐れみの目で覗き込んだ。

「キミ、ちゃんと謝った方がいいよ。あつくん怒るとすつごく怖いんだから」

「くくつハレルヤ！勘違いすんなよ、俺別に怖いとかねーし第一俺は人間になんか絶対謝らな……って、はれ？死神様？」

「へあ？ボクを知ってるの？……あ、フィーくん。」

死神が驚いたように目を丸くする。



オレは大きなため息をつき、死神に訊いた。

「また死神の知り合いか？」

「えへへ、まあね。友だちの悪魔だよっ」

照れくさそうに頭を掻きながらオレの足元を指す。

その言葉に今日二度目のため息。

「友達結構大いにつくるがいいさ。だが、お前の友達に住居不法侵入を犯してないヤツはいないのか？」

ちなみに天下の神様も立派な不法侵入者。

「まあ、……………いないかな。」

頬を染めてハニカんだように言う。

「っーかいなのかよ。」

そこにアクマ(?)が口をはさむ。

「死神様を責めんな人間風情が！ 無断で入っても誰も咎められないくらい高尚な存在だってことだ！ ハレルヤ！

……………てゆーかフッー俺らは見えも触れもしねーから気にする必要もないんだけど」

あ、そっか。

前半は足の下にいるやつに言われたくなかったが、後半部分を聞いて妙に納得したオレは足の下が悪魔を放してやることにした。

「ッてー…………。ンだよ、こいつ」

「口のきき方には気をつけろよ悪魔」

「構図から行くとあつくんの方が悪魔っぽいけどね？」

「確かに。マスター、もう少シやわらかく接してあげようよ」

「ハルの悪魔ー！」「」

てめえら揃いもそろって……

「そうかそうか、みんなで追い出されれば怖くないよなー。出  
てけ」

言葉と共ににつこりと微笑んでやる。

「すんマせんつしたああアアアああー！」

「うわああああ　　ん！ハル怖い　　！」「」

「ぐふ……っ！」

オレが優しく笑って言っていると、人形は即座に土下座し、悪霊どもは抱き合って顔を泣きだし、しまいには死神が魂が飛んでったかのように倒れこんだ。

おいおい、オレは悪魔か。

現職がいる前でやめてくれ。

「冗談だよ、ホレこつちの世界に戻って来い」

死神の襟元をつかみガクガクと揺らす。

まあ、半分以上冗談じゃねえけど。

そんな光景を悪魔はぽかんと見ていた。

「おら見せもんじゃねーぞ」

「死神様……何なさってんですか、この人間、もうすぐ殺すんですよ？」

「え？  
なんで？」

死神が素っ頓狂な声で逆に訊き返すと、悪魔はますます奇異な顔を  
して

「なんでって、俺らの姿が見えてるところか触れるっつーことは、もう死期も大分近いってことですよね」

「あーあー。でもあつくくんはボクの家主さんだから。てゆーか見えるのとかは体質だしね？」

「そーゆーこつた。さあとつと出てけ」

てゆーか、そこに開いてる空間の穴とかしろ！

妙に部屋が暗くなるし急に空気は冷え込むしつかなんかどろどろしたへドロみてーなダークマタみたいなの出てきてんですけど!?

悪魔はそこに突っ立ったままうつむいた。

と、肩が震えだしたかと思うと、口から声がもれだした

「フイクン？」

「ッ……うくくくく…ふふふはははあはははははは！」

ハレルヤ！　なんて素晴らしい！　ハレルヤ！　ハレルヤ！」

エクソシスト

「なんだ悪魔狂ったか、知り合いの悪魔払い呼んでやろうか？ い

「そんな意味で楽になるぞ一瞬で」

「ハレルヤ！ 遠慮しとく。そうかアンタがねえ」

悪魔はオレの前に立ち、ジロジロと全身をなめるように見る。色々言いたいことはあるがとりあえず

「変態かこの野郎」

「へぐっ！」

一発殴つとく

悪魔はゴロゴロと転がり、壁に激突。かなり良い音がした。  
しかも打ち所が悪かったのか、悶絶する悪魔。

「何すんだああああ！ ケンカ売ってんのか！」

「そりゃこつちのセリフだつつの。ケンカ買うつつんなら今なら五万で売ってやるわ！ 来い。」

「高っ！」

大げさに驚く悪魔。

「アンタ…、そおかなるほど、いろいろ納得した……。神の管理人やってられるわけだ……。えーと、なんつつたっけアンタ……？」

「アキだ、上谷秋紀。」

「かみや、あき…アキ……ああ、アキね。はは、ハレルヤ…なんつー名前だ」

お前にだけは言われたくない。

悪魔にいい名前じゃないと言われると、縁起悪いっつか気分悪いわ。

「俺は」

「悪魔のフィーくんだよっ！」

今度は死神が横から口をはさんでくる。

「うつせー、おめーに訊いてんじゃねーの！」

「マスター変なところでキレないで！」

「お前もこうゆー時だけ綺麗な発音してんじゃねー！」

突っ込んで悪いかああん？

最近いつかいキレて家事放棄して悪かったと思ってたから冷静に過ごしてたっつーにわざわざキレさすのはドコのドイツだ。

「いいよ、気にすんねイ。フィーって愛称も気に入ってたんだ、アキ」

「そか。でもまあオレの家族の問題だから正直お前は関係ない」

アキ、か。

珍しくマトモな呼び名だな。

「なんか親近感湧くわ、お前の名前。しばらくここいてもいいか？」  
「は？」

「いいよー、何日でも泊まってって！フィーくんなら大歓迎！」

「「フィーくんよろしくー！」」

「お手伝いシテ下サルなら、いくラデモうぞ。ようこそ上谷家へ」

「死神に招待される悪魔つてのものなかなかシユールだがね、お邪魔させていただきますわ。っーわけだ。世話んなるなアキ」

「はあああああ？！」

このあとオレが死神と人形に最高のブレンバスターを極めたのは言うまでもない。（悪霊どもは逃げて、悪魔は爆笑してやがった。殴っただけ）

## 8・あくまで普通。(後書き)

もうすぐ春休みも終わりですね。

というわけで、またまた更新が遅くなります！

本当に申し訳ございません！

こんな愚作者に呆れないで読んでいてくれると嬉しいです。

## 9 ・ 何気ない会話 (前書き)

な、七十八日ぶりの更新……！  
うう、皆さん未熟者の作者で本当に申し訳ありません！

## 9・何気ない会話

〔死神視点〕

手帳を軽くパラパラとめくる。

それだけでも目を見張る人数がそこには示されていた。

ボクは苦い気分でちよつとだけ息を吐きだした。

今日もボクはマジメに仕事をしてますです、ハイ。

『死神、キミは確かに今真面目に仕事をしてるよ。でも、キツカケは秋紀さんに家を追い出されたからじゃなかったかな？』

頭に苦笑したような声が流れる。

「神サマー、それチガウ。追い出されたんじゃない、自分から出てキターノ。ボクなんにも悪いことしてナーイ」

『なんでいきなりカタコトになってるのさ』

「人形のマネ？」

弁明するためにちよつと工夫したけど相も変わらずつれない神様。

『似てないよ。それに悪いことしてないって？ 仕事を危うくサボりかけたキミが何いつてるの。秋紀さんにさんざん叱られて逃げてきたんでしょ？』

「ちえっ、見てたの。人が悪いね神様も」

『僕は神だよ。それに僕はウソが付けないから』



……まあ、言葉の綾なんだけど。

「知ってますよーだ。で？ 次はどこだつて？」

『そうだったね。次はそう遠くはないよ、せいぜい1000キロ…』

「普通に遠いよ。知ってる？ 日本列島って全長2800kmくらいなんだよ？」

『知ってるよ、僕が作ったんだから』

今度はボクが苦笑する番だった。

「もう、混ぜっ返さないでよ。ていうか何で？ そこら入んの担当は？」

ちよつとだけ口ごもる神様。

『……………死んじやったよ』

「引き継ぎもナシに？」

『うん』

「止めてよ！」

『そんなこと言っただつて……………』

ボクはため息をついて言葉を返す。

そうしているうちに目的地が近付いてきた。

「どーせ黙って死んじやったんだろ。まったくもう何考えてんのさ。神様も気づいてよね！」

そういったけど、神様からは沈黙しか返ってこなかった。

「かーみさまぁ？」

『……死神』

「何さ？」

『僕もそろそろ死ぬべきかな……？』

「は？なに言ってるんの神様」

『だって創世の頃から居るのつてもう僕たちだけじゃない。そろそろ潮時なのかなって』

「神様のバカ！意気地なし！そんなコトしたらボクひとりになっちゃうじゃない！！！」

『……何そのセリフ？』

「ヨーコがやってたギャルゲーより引用」

『……それはキミもやってるのかい？』

「悪い？」

『……あははっ。いや、いいんじゃない？ キミらしいよ』

「それ誉めてる？」

『うん。楽しく生きてるってことじゃない。キミも、ヨーコさんも。』

「むう、そっかな」

『ヨーコさんかあ、実は僕会ったことないんだよね。今度遊びに行く時に会えればいいなあ』

「また来るの？」

『そのつもりだよ』

「そっか。次はお土産期待。と。あ、もう着くみたい。じゃ、この辺で」

『うん』

さあてと、これから死ぬ人はどんな人かなって。

これから死ぬ人には悪いけどボクはもうしばらく死なないよ。

もつと生きてるのをエンジョイしたいもの。

そう思えるようになったのは、ダレのおかげ？

《おかげ》っていうかダレの《せい》？

結論：あつくんのせい

これしか原因が思いつかない。恨んでやろうかな、でも軽くでも恨むと無意識に祟っちゃうんだよな。

ま。いつか。

明日どついところ。

ボクはまだまだこの世で遊ぶ。

だってここは楽しいくて愛おしいことがいっぱいあるんだもの。

娯楽も仕事もかわり合いも辛い時だってあるけど、今は楽しくて仕方がない。

ゲームもマンガも、そして人も。

絶対にはなしてなんてやるもんか。

あっかんべー！

って報告書に書きちゃおっと。

くひひひひひっ！

## 9・何気ない会話。（後書き）

前回の更新がいつだったっけ？

え？春休み終わり直前？

HAHAHA冗談じゃねーぜジョニー。

更新が遅いにもほどがあるってんだ。なあマーク？ もう夏休み近くだぜ。

ホントウニダメダコノサクシャorz

スランプとは恐ろしいものです……ッ！

呆れないで見て下さっている皆さま、更新が遅くてごめんなさい。そして、本当にありがとうございます。

10・ 烏が帰る、夕方。（前書き）

やっとこさ、十話目です。

これから

がんば……がんばりま……

……頑張りたいと思っています！（おい）

10・ 烏が帰る、夕方。

「アキー」

うるさい。

「ハルー」

あーうつさい。

「アキちゃん」

……いらっ

「うつせーつつてんだろーが！ 疲れてんだよこっちゃんあ！」

怒りをぶつけるようにちゃぶ台をひっくり返す。  
ちっ。湯飲みの茶をかぶったのは悪魔だけか。

「なにするの、アキちゃん」

飛びすさぶ茶と悠々と避けてのんきに返答してくるヨーコ。

「疲れてんだつつてんだろーが話を聞け無駄飯食らい狐。やること  
とが山積みなんだよ」

「ああ、なーるほど、ボクとおそろいだね」

「お前と一緒にすんな、暇神」

何故か手元にあったトイレスリッパで後頭部をはたく。

スパンといい音がなった。

いや、八つ当たりだとはちゃんと自覚はしてるから手加減したけどね。

視線ななめ下で死神があまりの痛みにゴロゴロと悶えていたとしてもその横で熱いとわめいていたアクマはあわてて人形にお茶を拭いてもらっていつの間にか復活を果たしていた。

「アキ！ さすがに横暴だぞ！ いくら神の管理人やじぬしやってるからって、その扱いはないだろ！」

なんか言ってきたが、意識があるだけマシだと思いやがれ。  
あんなと一緒にされたくないの。

「お前この幾日で何学んだ？ 人形の飯の味とか悪霊どものかくれんぼの隠れ場所とかだけとか言わねえよなア」

「まっさか！ それもちろんあるけど、なにより、アキの拳固がオリハルコン並みに硬いとかアキの蹴りの威力ハンパねえとかアキの趣味が盆栽とかほうじ茶がスキとか意外と爺くさいとか近隣の人外連中には恐怖っつーか畏怖の対象っつーかだけどご近所のおばちゃん達からは結構ウケがいいとか実家が神社とか テコを指にはめて食うのがスキとか、その他イロイロと知った……って、のわうわ！」

「よーし齒あくいしばれ」

前ふたつはむしろ本能にしみこませるくらいカラダに刻み込んだくらいいいとして、なんで知ってたんだ、特に後半。

本当はジャイアントスイングくらいはかましたかったが、何分狭いアパートの一室、簡易ドロップキックくらいが関の山だ。

「っーかお前、いつまでここにいんだよ」

「はあ？」

ある程度の威力に加減したので、辛うじて意識を保ちきつてよろよと体勢を立て直したアクマは、言葉の意味がわからないと言うように、首をかしげた。

「すつとぼけんな。なんかしたくて来たんだろ？ 本格的に住むとか言いやがったら、ブレーンバスターから始まる天獄地獄コンボお見舞いすっかな」

「あーそう、バレてたの。てか天獄って……」

「当たり前だよ、逆ニコの家の住人で気付いテナイ方がびつくりだよ。ね、マスター」

はいお茶、とアクマの前に湯飲みを置いて人形が口をはさむ。

オレの前にもふわりと湯気が香ばしく香るほうじ茶がことりと音を立てて置かれた。

その通りだ。

それを聞いたアクマはやっちまったとでもいいたげにガリガリと頭をかいた。

最近思っただが、やっぱりコイツ、悪魔のくせに言いたいことはつきりと顔に出る。

仕方なしと判断したのか、ため息をついて開き直ったかのように手元のお茶をずすとすすった。

「まア待て、あとちょっとで準備できつから、な、それまでヨロシク、ハレルヤ！」

ヨロシクじゃねーよふざけんなコノヤロー、と言いたところではあったのだが

ふと、気になることがあったので前言を押しとどめ聞いてみた。



「ハレルヤハレルヤっていつてつけど、お前そんなに晴れてほしいの？ アクマなんだったらハレとか明るそうな天気じゃなくって雨とかのほうが好きそうな気がすんだけど」

「んー、そうだな俺としてはジメジメするから雨より曇りの方がスキ……っておい！」

おお、ノリ突っ込み。

悪魔って何でも出来んのな。

「ちっげえよ！ ハレルヤっつーのはヘブライ語で『主をほめたたえよ』って意味！」

「そうそう。ア ril li ya とも発音するんだけど、日本語だと言いにくいんだよねー」

「ふーん、ヘブライ語とかアーメンくれーしか知らんし」

アイツ  
「從兄弟に聞きや死ぬほど教えてくれんだろーが。」

いや、やっぱいいわ。そもそもとしてまずアイツにあいたくねーし。しかしなあ

「珍しいヤツもいるもんだな。悪魔の中でも神さま崇めてる奴なんていたんだ。オレの知ってる悪魔っつーか赤い蛇っぽい奴は天使のくせにめっちゃ嫌ってたぞ、神さま。実際会ってみたら気まぐれそうだけど、真面目っぽくてお前よか好感抱いたなオレは」

つーかアイツは短気なんだよな。

なんだよ、『葡萄の木植えて何が悪いってんだ、美味いじゃんリンゴもブドウも。マジイラッた』って。

そこで視界の隅に入った黒い布。

「あ、そか、死神がいたか」

納得。

が、アクマはそれでは納得しなかったようだ。  
しろよ、納得。

「ハッ！ 何勘違いしてんのかわかんねえが、少なくとも天上の神  
なんかだあれが敬うかってんだ。死神サマは確かに尊敬はしてるが、  
主じゃねーよ。俺のあるじはただ一人のみ……」

そのとき不意に、アクマの手が光りだした。

「ちいと早いがこんだけの力場だ、なんとかかなんだろう」

アクマはしゃしゃしゃしゃーと光ったままの手を床に滑らせた。  
みるみるうちに光り輝く魔法陣が部屋の床を占領していく。

そしてほんの瞬きの間に部屋は暗い光に包まれていた。

おいおいここは借家なんだぞ、消せるんだろうな。

「おい」

「もっちゃん、召喚し終わったら消えるさア！」

この数週間でオレの言外の言葉を学んだらしいアクマはオレが何か  
言う前に応えてきた。

それならよし。

魔法陣のラスト一筆まで書き込んだのち、最後の締めとでも言うよう  
に若く美しい紳士の容相をした悪魔は、どこぞの錬金術師のよう  
にぱんつと両手を合わせ、ニヤリと笑った。

「我は求め訴えたり。このくそつたれな世界を愛し憎み破壊し偽

り見届ける、我が名、光を愛せざる者　メフィストフェレスの名  
において、希う。万物は帰り還れ。その過程において我は欲す。現  
は夢になり、夢は現世になる。我は願う、我が名とこの場の力を糧  
とし彼の者のあるべき場所から俺が今いる場所へといざなわんこと  
を！」

「をうおおおおお！」

が、不思議なことにその火は壁やまったく天井を焦がさず、魔法陣の周りを舞っている。

が、次の瞬間壁にぼうつと黒い炎が灯りそれを見たアクマの顔色は暗かったものから一転、歓喜のそれに代わる。

どんつと爆発音がして炎は消え去り部屋にもうもうと白い煙が包み込んだ。

「笑い過ぎじゃアホ二回もむせてんじゃねーか」

「のわっ！」

背後に立つオレに大げさに驚く悪魔。

「あっああああきい?!」

「うん？」

おかしな驚き方をする悪魔      メフィストフェレスにフライングク  
ロスチョップ

吹っ飛んで壁にめり込んだメフィ：ああ長いアクマのまんまでいい  
や      はぼこつと壁から這い出てきて、叫んだ。

「なんで生きてんだよ！      地獄の炎で焼いたんだぞ！      おかしくね  
?!」

「私が護ったんだもの、怪我なんてするわけないじゃない」

得意げと言うか余裕というか当たり前にあたりまえなことをしたと  
いう表情のヨーコに、脱力をした悪魔。表情的には、絶望という言葉  
葉はこういう時に使うのかなって感じの顔をしている。

まあ普通だわな。

てか今までオレの人生で起こったことを考えたら、地獄の炎なんか  
いくらでも見てきてるし。

一口に地獄の炎つつたつて、ゲヘナの炎とか灼熱地獄の黒い炎と  
があるしなあ。

ちなみに黒炎を初めて見た幼い頃のオレの感想は「キモ」だったそ  
うだが。

「お茶目なのもいい加減にしなさい、いつでも殺るわよ」  
「だ、そうだ。残念だったな」

まだちょっと悔しい表情が取りさられていない悪魔は少しでも自分のペースに引き戻そうとしたのか、高慢ちきな笑みを浮かべて言い放つ。

「別にそこまで殺そうとか考えてねーしな。死んだらそれはそれでいいかもくれーにしか」

イラッときた。

「死ぬ か？」

「うつつそです違いますほんとは生きていらっしやってくださいってうれしいですってハレルヤ あああ！」

一つため息をついて、怒りを納める。

さすがにこれ以上怒っても仕方なし、壁が一部焦げたくらいで、家具やらなんやらに傷がつかなかったただけいいことにしよう。

大人になったなオレ。

そして怖えな大家のおばちゃん。

「で、何が来たって？」

「よくぞ聞いてくれた！ 彼のお方こそ、俺が我が主と称える方、その名は『るしふ…』」

どがごんっ！

得意そうに語りだそうとした悪魔の頭に怒りが込められた重い鉄拳が降ってきた。

ちかちかと瞬きを繰り返している目からは衝撃の瞬間確かに星が飛

びだした。

「ん？」

「あ！」

白く煙っていた靄の奥から現れた男は全身真っ黒だった。まるで闇で覆われているみたいだ。

しかしよく見てみると、そこまで特異な服装でもなくダークスーツに、表が黒で裏地が紅のマントを着ているだけだった。

見た目的には20代中盤から30前つてとこか。

中世的だが、やけに美人というかやたらめったら整った顔立ちをしていた。

人形に勝るとも劣らずってかんじ。

ん？ そーいや人形にどことなく似てるかも。

その真っ黒青年はその細く形の良い顎をついと動かして悪魔に一瞥をくれたのち、部屋の中を見回すように視線を動かした。

「ルシファー！」

死神が驚いたように目を見開き、彼に向かってぴんと人差し指を伸ばした。

こちら、人（？）に向かって指さすんじゃない。

「ん？ ああ死神さん、おひさしぶり」

「おひさー！ そかフィーくんが召喚したのキミだったの。そりゃ召喚したくなるよねー最近特に必死だもんねー」

「からかうな、恥ずいから」

恥ずかしいと言いつつも、真っ黒青年の表情筋はほとんどその役目を果たしていない。

口ではとてもわかりやすく照れているのだが、表情が変わらないのでその真意は非常に読み取りづらいものとなっている。

だが、表情が豊か過ぎて逆に心が読めないヤツをアキは嫌というほど知っているのです、いっそ完全に無表情な方が感情を読み取りやすかったりする。

人形は新たな客人を前にお茶の用意をとパタパタキッチンに向かい、はじめてみる客人の前に珍しく姿を現している悪霊たちは物珍しそうにくるくるとまわりをまわっていた。

ルシファアの登場により状況が混沌となっっている中、最初に口火を切ったのはオレだった。

もちろんお馴染みの言葉となってしまうているこの言葉を言うために。

「だれだ？」

「ああ、私はルシファアという。魔界を統べる者のひとりを務める者だ。普段は魔王とかすべての悪魔を統べる王とか堕天使などと呼ばれている」

ほんの一言言っただけなのに、聞いてもないことをつらつらと並び立てる。

へえ、手間が省けてラッキーだ。

「聞いてないことまで律義に答えてくれて、ありがとう。で？ 魔王、とやらさんはなににきた」

魔王　ルシファアはオレの質問を華麗にスルーし、別のことを話しました。  
もちろん無表情で。

「お前のことは聞き及んでいる、カミヤ アキ」

「へえ、どんなふうにな？」

「聞きたいかな？」

「魔王にウワサ聞くななんて縁起悪そうだし、遠慮しとく。しかも全く関係ない魔界のだし」

そこで魔王は表情をちよつとだけ落とした。  
もちろん口調だけ。

「そうか。そこにいるのも含め、なにやらアゼルやベルゼ果てにはサマエルがはなしていたものでな」

サマエル……、あーあの赤蛇野郎のことか。

そういつて一瞬だけちらりとアクマに目をやる。

つられて魔王もそちらを向き、ほんのかすかに  
慣れていないとわからないほどほんのちよっぴり  
情を暗くした。無表情な奴を見  
眉を下げて表

「ウチの馬鹿が申し訳ない」

そう言つて魔王はペコリと頭を下げた。

「や、アンタが謝るようなこつちやねーよ」

んな簡単に頭下げんな。

魔がつくとはいえ王の頭はそんな安いもんじゃねーだろ。

「しかも今回の場合あんたは召喚はつみされちまつただけだろ？」

それにもとはといえば原因は……



「オラアクマ、起きんかい」  
「メフィスト、減給食らいたいのか起きろ」

オレと魔王はほとんど同時に言った。  
息が合うな。

ふっと目を魔王の方にやると、魔王もこちらを向いていて、何かが通じ合ったように感じた。

次の瞬間にはどちらともなく握手を交わしていた。

「こつちは任せろ、一応客だ。お茶でも飲んでればいい。おい人形茶。ほうじ茶」

「わかった。では改めてお邪魔させていただく」

そういつた時にはすでにちゃぶ台のはしに腰を下ろしていた。  
人形はすかさず、すでに出廻らしになった急須の茶を捨て湯呑みに新しいほうじ茶を注いだ。

その後、目を覚ましたアクマにくどくどねちねち説教と技を繰り返したのと言つまでもない。

一方、当の魔王は子供たちと何故か妙に仲良しになっ

「ねえ」「ねえ」

「「ルシファー？」」

「なんだ？ 子供たち」

「僕……」「私……」

「「どつちで呼べばいいの？」」

「え？」

「お兄ちゃん？」

「それともお姉ちゃん？」

「ああ……、んーどちらでも」

「じゃあねー……」 「んーとねー？」

「そんなに悩まずとも本当にどちらでもいいんだが」

「「おぬーちゃん!!」」

「は？」

「おにーちゃんでも」

「おねーちゃんでも」

「ないんなら」

「違うんでしょ？」

「だから」

「間を取って」

「「おぬーちゃん」」

「……… ああ確かに」

こんなほのぼのとした会話を繰り返していた。

そうして時間がたって、気付くと窓の外はもう夕方に近かった。

「ああもうそろそろお暇させてもらうか」

会話がちょうど切れたとき魔王がそういつて、立ちあがった。

……ん？

「帰れんのか？ 召喚されたんだろ？ 強制送還でよければ専門家のなものを呼ぶが。」

楽に逝けるぞ」

「いや、良い。こいつもつれて帰らねばならないことだしな。それに下手すれば消し飛ぶだろう？ その専門家」

「いや、たぶん下手しなくても消し飛ぶ、コイツレベルだと」

指さした先には本当に伝説級の悪魔なのかと問いかけたくなるほど弱っちい姿で死神と折り重なるように眠りこけているアクマが一人。それを聞いて魔王は苦笑を洩らした。

「人間の魂を永いこと喰らってないからな。昔は長くとも五十年に一回は契約できたんだが」

すこし愚痴っついていいかと前置きしたあと、やっぱり表情は見えない顔の眉を寄せて魔王は口を開いた。

「今では悪魔を呼びだそうとする者どころか、そもそも自分の闇を自覚しすぎている人間が多い。闇に付け込もうとしても、その闇にのまれてしまう悪魔が後を絶たないんだ。不滅不変だと思っていたものが少しずつ数を減らしていく。だから混乱して皆必死になっている。こいつも何かを思って何かをしたくてこうしてここに私を呼び出したんだらう」

こいつは腹の減りすぎで頭も口も回らなくなるし、最近はこうして行動を起こす悪魔どころか悪魔そのものの頭数が減ってしまっている…と魔王はぶつぶつ不平をこぼした。

オレはそれに笑うでもなく同情するでもなく、ただ「そうか」と一つ頷くだけにとどめた。

所詮はオレの手の届かない世界のことにはすぎないし。

もし届いたとしても…もしくはもう関わってしまったているのだとしても、やっぱりオレは「そうか」とだけ答えたんじゃないかな。それがオレだから。

ま、どうでもいいことだが。

「で？ 帰れんのか帰れないのかどっちだ。即行で答えるアクマ。」

でないとマジで消し飛ばすぞオレが物理的に」

「なおう！　なんでアキはそんなに攻撃的なんだよ！　ああもう帰れるよ、帰れます！」

アクマは文字通り跳ね起きた。

上につてた死神を吹っ飛ばして。

綺麗にくるくると回転しながら空を舞う死神は一瞬の出来事のくせにスローモーションのようにゆっくり見えた。

どずっと尋常でない音がしたと思ったら、巨大化した死神の鎌がアクマの横に深く深く突き刺さっていた。

実態はないので見た目だけとオレと魔王はわかっていたが、自業自得だとばかりに固まったアクマから目をそらした。

「で？　そこんとはどうなんだ？　魔王」

「ん、メフィストが私を召喚した時、どうやら壁に“道”を作っておいてくれたらしい」

「あ？　みち？」

「ああ、ここをあつちをつなぐな。あくまで簡易的に作ったものだからいつ消えるかわからないが」

そう言つて、魔王は壁に近づいて焦げた部分をなぞる。そうすると魔王が触つたところから焦げ目が光りだした。

焦げたのだとばかり思っていた部分はよくよく見てみると黒い手のひら大の魔法陣だ。

それを見たアクマは、即座に復活し、びしっと魔王の前に敬礼の姿勢をとった。

（コイツぜってーオレの部屋にきてから回復力上がったよな）

そう思わざるを得ない回復の早さ。

「そこんとは平気です、魔王様！俺が責任を持って、柱立てときました！」

「ボクも手伝ったから、半永久的に使えるんじゃないかなあ？」

オレの額からピキツという青筋が立った音が。

「余計なことすぎる十点減点」

「何が!？」

「百点ひかれたら、オレ直々に家追ん出してやるという賞品が！」

「凄くいらない!？」

「副賞として、業火景品ヨーコの狐火が付いてきます」

「字が違うよあつくん！」

死神、泣く寸前。  
知るか。

「まあ、と二カく帰れルンダヨね」

「あ、うん」

それを聞いたとたん、悪霊どもから不満の大合唱。

「「ええ〜〜〜！おぬーちゃん帰っちゃうのおー?」「」

「またこれるから」

そりゃそーだろーよ。

「こっちや忙しいの」

「知ってる」

魔王の一言でオレの堪忍袋の緒が限界値に達した。  
だったらとつとと……

「帰れ」

そういつてふたりの魔界の住人を少々乱暴に 特にアクマはめり  
込むほど 壁に押し付ける。

パあっとな輝きが部屋を包み込んだと思った時には二人の姿は消えて  
いた。

10・ 烏が帰る、夕方。（後書き）

秋たけなわの今日この頃、次回更新いつあるの？ 教えてついでに助けてアキえもん！。

アキ「は？ 知らん。こつちも忙しいんだよお前のせいで。消えとくか？ このあたりで。買う？ ケンカ。今なら格安で売るけど。タダだよ口八だよ無料だよ」

マジすんまっせんした！ 勘弁！

どーでもいい余談。

この仮小説タイトル『おぬーちゃん』でした。

話ができる前から「このワードだけは使う！」って決めてました。

なんだこの作者Il i o r z l i l

ちなみに、今日キリサキの学校は台風と新型インフル（H1N1）つていうんだっけ？）のせいでお休みです。やつふう！

ご意見ご感想その他誤字脱字などがありましたら、よろしく願います。待ちまわっています。

11・星光る、宵。（前書き）

そっかー四か月。一年の三分の一かあ。  
うふふふふ、すみませんorz



11・ 星光る、宵。

「おっかいもの」「おっかいもの」  
「どれがいいかな」「どれにしよう？」

幼い者特有の甲高い声が冬のぴんと張った空気を揺さぶる。  
それぞれ楽しそうに口ずさむCMソング。  
お手々をつないで、大変仲がよろしいようだ。

仲良きことは美しきかな。

こいつらを見てると心の底からそう思う。  
だがしかし。

「ハル―あれ買つてー！！」

これはいただけない。  
結婚もしてないのに、駄々をこねる我が子のわがままを聞いている親の気分だ。

「こら、静かにせんかい」

「マスター、普通の人には聞こえないから」  
「オレが耳障りなの」

他の迷惑なんぞ知るか。

ぶっちゃけ、死神 悪霊 悪魔 神など見えない人外系統にはほぼ常識というものが欠如している場合が多い。ついでにわがままで自分が世界の中心だともいうような傲岸不遜ぶりがムカつく。良く言えば誇り高い、現実を見ればジコチューの塊。

しかしどうもこいつも結局見えやしないんだから、そんな奴らにずうっと昔から接しているオレは配慮なんて必要ないことも嫌とい

うほど知っている。

オレは一つため息をついて、オレにだけ見えるふたつの影を見上げた。

ま、悪霊といっても今のこいつらの思考は完全に子供だしな。

一応、い・ち・お・う、聞くだけ聞いてみるか。

「で、何がほしいって？」

そう言いながらちらりと財布をのぞく。

うん。それがなんであれ今余計なモノ買う余裕なんぞ、これっぽっちもない。

「「あれ」」

「具体的に言え」

「あれだつて」

「あれだよ？」

ふたりは同時にぴつと人差し指を突き出した。

その先は

「ありや？」

「あれれ？」

「あんだ、欲しいもんバラバラじゃねーか」

別々の方向を向いた指先。

子供たちの細く短い指は同じ方向でもなければ正反対でもない、てんで違う方向を指さしていた。

「いらんモノふたつも買う金はねえ」

まあ、もともとないのだが。

良いいいわけを見つけたと、再び歩きだそうとしたそのとき、誰かに後ろから引つ張られた。

人形だろう。

当たり前だが、この中でもものに触れるのはオレの他に奴はコイツしかない。

振り返ると、変な顔をした人形がぼうつと服の裾をつかんでいた。自分で眉間にしわが寄るのがわかる。

人形は悪霊たちを不思議なものでも見るかのように眺めて、ぼつりと呟いた。

「珍シイね、ふたり一緒じゃないなンテ」

それから同意を求めるように、くりゅつと首をかしげて俺の方を見る。

いや、そんな目で見られても。

まあ人形からしたら驚異だったのだろう。

毎日家政婦よろしく家事を一手に引き受ける人形だから、その中にはもちろん買い出しも悪霊たちの育児(?)も含まれている。

ずっと家にこもりっぱなしの悪霊たちと生活のほとんどを共に過ごして、時々気まぐれを起こした悪霊たちが買い物についてくる日なんかは、それこそ比喻ではなくまる一日一緒に過ごしていることになる。

そんな人形が、一緒じゃないなんて珍しいということは珍しいどころの話ではないのだろう。

未曾有の大事件級の出来事だ。

「なんでなんで！」

「どうしてー?!」

答えに窮して、微妙な気持ちで人形と見つめ合っていると、ずいぶ

ん上の方からあわてたような声が聞こえてきた。

見上げるとさつきより高い位置で、ぴったり同じポーズをとった悪霊たちがそろって頭を抱えている。

悪霊ふたりはうろたえているというよりも、愕然としているように見えた。

言葉こそただ困惑しているだけののように聞こえるが、その実彼らは絶句して立ち尽くしていた。

ん？ 空中で呆然としてるから、飛び尽つくしていたか？ どうでもいいな。

そのようすはムンクの「叫び」のごとく、奇妙な光景であった。いや、むしろあの絵そのままといっても過言ではないだろう。

一般的にあまり知られていないが、ムンクの「叫び」は、描かれている人物自身が叫んでいるのではなく、「叫び」に怖れおののいて耳をふさいでいる光景が描かれているのである。

だからこそ、言葉を失って頭を抱えている悪霊たちがそんな風に見えたのだろうが。

「まあいいだろ。それぞれ違うモンがほしいってことは、それだけ『自分』って奴が育ってきたってこつたろ。喜ぶべきじゃねえか、成長」

悪霊どももそろそろ物心ついてもいいお年頃なのではないか。ていうかいたずらが過ぎんだチクシヨめ。

自我の芽生えこそが成長の証、とかなんとか昔の偉人が言ってたような言わないような。

悪霊が成長すんのかどうか知らんがな。

「そう、ダね。今日はお祝イかな。よし、今日の夕飯ノ献立ハお赤飯に決定。良いよね、マスター」

「勝手にしろ」

小豆か。

最近高いが仕方がない。

めったにないご馳走だ。

居候の祝いとは言え、甘んじてやろうではないか。

……親バカだといってくれるな。

## 11・ 星光る、宵。（後書き）

とりあえず、読者の皆さま申し訳ありません。

なんでこんな更新遅いのかとか聞かないでくれるとありがたいです。学生なんですテストがあるんですとか言いません。作者の力量不足です。

というか今更なんなんですけど、サブタイトルってあんまり内容と関係ないです。適当というか、その場のノリでつけてますんで、なんか良いタイトルがあれば教えてください。

それではまた二ヶ月後くらいにはお会いしたいです。作者でした。

## 12・青空、赤くなる前。(前書き)

ぎりぎり2カ月以内です。

更新速度…どうにかならんもんか……。

ホワイトデーはオレのものーw

## 12・ 青空、赤くなる前。

イライラしている。

イライラしていた。

「おい死神、何キレてんだよ」

「怒ってないよ、イライラしてるだけ」

「やっぱへそ曲げてんじゃねーか」

嘆息するあつくんを横目にてこてこと前進。

ボクはいま、自分がひとに見えるようにしている。

もちろん姿はあつくんと同じくらいの年頃。

蒼いパーカーに、古びたジーンズ。

結構前にあつくんに買ってもらったお気に入り。

すりきれて、色あせているけど、それも時の流れがさせるもの。

その流れがとつても愛おしい時もあるけど、でもいまは……。

「なんだっつーんだまったく、何が気に入らなかったんだ？」

「別に？ いや、あの時は大変だったなあって思ってたさ」

「……………ああ、アレな」

忘れたふりをしてとぼけるあつくん。

ある意味ありがたい、ごめんね。

今日は久しぶりにあつくんちの学校へお邪魔した。

まあその時はさすがに姿さらすわけにもいかないし、消えてたけど。その日受ける最後の講義だったらしく、あつくんは疲れた顔をして「今帰んなよ。帰りに新しい服買ってやるから」と引き返しかけた



ボクの袖を引いた。

ヒマならこれで終わりだし授業でも聞きながら待つてると命令して、むりやり自分の横に座らせた。

ボクもボクで「ハーイ」とか無邪気に喜んでたまではよかったんだけど……

「あつくんみたいに憑いた人も、友だちだった人も神もみんなみんないなくなっちゃった。ボクが殺ったんから、当たり前なんだけどね」

そこでわざとケタケタと笑ってやる。うわ、サイテーだボク。

ま、人間の想像上の死神はもつと最悪だし冷酷だし鬼畜だから、たまにはこれくらいいいでしょ。

あつくんは眉根を寄せて難しい顔をした。

「ここだって何人もいたんだよ、昔からの友だちって呼べる神さまが。でもみんな、疲れすぎて死んじゃった」

「過労死？」

「過労死っちゃん過労死なのかな。身体的にはそんな疲れてなかったんだけど、心が疲れたって言うって早々に死<sup>ヒト</sup>んじゃった神もいたよ」

今日の世界史の内容は第二次世界大戦について。

特にこのあたりのことについてやった。

最初は

たったひとりの神の遊戯。

たかがひとり、されどひとり。

数ではない。

質ではない。  
存在なのだ。  
神というモノは。

事実だった。  
すべて事実だったんだ。

80過ぎの教授は空襲はいかに恐ろしいことだったかを、手振り身振りで延々と語って。

『空に浮かぶ黒い粒。それがどんどん大きくなって我らの頭の上に降ってきた。恐ろしかったよ。これほどまでの恐怖があるうか。私は戦争が終わり、思ったよ。心の支えだった信じていた天皇が、神が我らを見棄てたのだ。そして国は国民を死神に差し出したのだ、と』

いつもは眠そうにただ淡々と進めるくせに、今日に限って涙ながらにそう熱く講義を締めくくった教授をあつくんはこれ以上に恨んでいた。

（ンで、今日だったんだよ……！）

あつくんも表に出さないだけで、そうとう怒り心頭って感じ。

心配してくれてありがとっていいんだけど、頭のぞいたことバレるの怖いしだまっところ。

「ねえあつくん？」

「……………なんだよ」

「もう帰る？」

あつくんはがりがりと頭をかいて、首を振った。

変わってないなあ……

これは彼が自分の中の何かを切り替える時のクセだ。  
再会したのは最近だけど、最初に会ったのはずっと昔だから。

……変わったのは、ボク、なのかもね。

そのずっと昔から彼のすることや考えることは変わってない。  
そうしているうちにあつくんは一軒の店を見つけ、ボクのフードの  
部分をひつつかんで店内へ引きずり込んだ。  
店は今どきという言葉が似合う、実にカラフルで明るい感じがする  
気持ちのいい場所だった。

「服買って帰るつつたろーが、何のためにお前を待たしたと思っ  
てんだマヌケ」

ぱかんと殴られた。

いや、イメージ的にはぽこんとかぽこたとかそんな感じの擬音では  
たかれたっていう方が適切かも。

まあ街中だしね？ 遠慮したのかも。

珍しくあつくんにしては常識がある、ちょっとした驚きだ。

「オレにしては、ってどーゆーこっちゃ。オレは常識人だっつーの」

「あんれー？ 声に出てた？」

「出てるわ、存在が非常識神<sup>じん</sup>」

あらゆる服を網羅している店内から自分に似合う服を探すというの  
もなかなか難しいのではないかと思う。

それこそ、神様でも至難の業なんじゃないかな。

今度きーてみよ。

ボクはちよつぱり軽くなつた心に嬉しくなり、氣になつた服を手に取りつて体に当ててみた。

まあその氣になればどんな服だつて着れるんだけど。

「あつくーんこれどお？」

「んー？ 黒のとつくりセーター？」

「セーターじゃないよお、しかも言い方古いし！ 今はタートルネツクっていうんだよ！」

なぜかボクに教えられて、さして興味もなさそうにうなずくあつくん。

あつくんて若者の自覚あるのかな？

普通神サマとかのほうが世間知らずなもんなんじゃないの？

ボクは地域密着タイプだからあんまそういうのないけど。現場人（神？）だもんねボク。

「あ、そ。ただとお前仕事でも黒私服も黒つてヤになんねえ？」

「好きだからいいもん。あ、こつちの白と、このジーンパンは？」

「いーんじゃねーの？」

「あつ、見もせずひどーい！ こうなつたらあつくんのも選んじゃお！」

「オレの許可なしに何やろうとしてんだあアアア！」

楽しい。

と、思える日がまたやって来るなんてね。

この記憶を抱えたままで良かったかどうかは分かんないけど。

ボクも死のうと思つてたのに、みんな死んじゃうから死ねなくなつた。

……ひどいよ。

ねえ神様、もうすこし神生をエンジョイしよーよ。  
死ぬなんて言わないでさ。  
あつくんが、悲しむから。

## 12・青空、赤くなる前。（後書き）

いつの間にやらユニークは6000、PVは二万をとうに越していました。ありがたや。

コメントも色々貰って、作者は感涙でセルフエコノミー状態でございます。

作者が今年受験生で更新がこれからもつと遅くなるかもしれませんが、どうぞ見捨てずこれからもよろしく願います

マイペースで頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7455e/>

---

オレの部屋

2010年10月9日17時54分発行